

○「時代を語り建築を語る会(第10回)」報告

9月25日に東広島市中央生涯学習センターで「時代を語り建築を語る実行委員会」(代表:石丸紀興)主催による第10回目の語る会が開催された。

今回の語り人は石丸紀興氏(広島諸事・地域再生研究所代表)と李明氏(岡山理科大学准教授)の二人で、広島地域における建築家(主に豊田勉之を中心に)とその活動について語られた。

☆ 第1部:石丸氏「地域の建築の設計者を探し見つける喜び」

・昭和61年に被爆建物の広島銀行銀山町支店の解体が始まり、建築分野の人が何も言わないことに疑問を感じていた。

・平成元年から被爆建物の調査研究と保存運動に目を向け始める。

・被爆50周年を記念して出版された「ヒロシマの被爆建造物は語る」

の編集に関わり、被爆建物の設計者を探す。著名な建築家は研究されているが、地方の名もない建築家は注目されていなかった。この作業でレストハウスの設計者が増田清と判明し、他にも本川小学校、市庁舎等も設計していることが分かった。



広島合同貯蓄銀行
(旧広島銀行銀山町支店)

☆ 第2部:李氏「豊田勉之の作品とそのデザイン的特徴」

・20年来、広島近代建築とその設計者について研究。辰野金吾・長野宇平治・山田守等の著名建築家のほかに、設計者不詳であった被爆建物・広島合同貯蓄銀行本店(旧広島銀行銀山町支店)が豊田勉之の設計と判明した。

・調査の結果、呉市を拠点として活躍した建築家。東京の建築専門学校を卒業後、大正元年に呉市役所に入り、大正13年に退職し設計事務所を開設。呉銀行本店及び支店、呉商工会議所ビル等の設計・監理を行う。それらの実力が認められ、昭和11年に広島合同貯蓄銀行を設計。昭和12年から22年まで呉市役所に戻り、建築課長を務める。

・当銀行は絵葉書にも採用されるほど装飾的な様式建築として親しまれていた。

<会場より>

味わいのある歴史的建築は現代的価値を持って都市の中で残り続けて欲しかった。

(編集委員 瀧口信二)

○「時代を語り建築を語る会(第11回)」報告 語り人:三宅恭次氏 ～広島戦後経済復興を語る～経営者の苦闘と戦後広島形成～

RCC時代に広島被爆40周年の特別番組「瓦礫の中から～広島経済復興史～」を制作した三宅氏の立場から、当時取材した人たちの貴重な生の声を踏まえた話を聞くことができた。

主催:時代を語り建築を語る会実行委員会(代表:石丸紀興)

日時:2015年11月25日(水)18:00～20:00

場所:合人社ウエンディひと・まちプラザ

☆ 被爆40周年特別番組「瓦礫の中から」

・原爆報道が主流の中で、軍都広島ならではの戦後の目覚ましい経済発展の視点から取り上げた。当時毎週土曜日、テレビ番組「経済展望」を担当し、経済界の多くの人にインタビューする機会があった。まだ戦争を体験した人が残っており、余談話を聞かされて彼らの逞しい生き様に心を打たれたのが、この企画を思いついたきっかけ。

・番組の内容は被爆後の経済復興に尽力した人達16人の証言で構成され、軍によるインフラの復旧から銀行の営業開始、ヤミ市から福屋・本通りの復興、東洋工業・三菱重工業の復興、都市計画の復興構想から平和記念都市建設法の制定、支援母体としての二葉会等について語っている。



略歴:慶応義塾大学卒業、1968年中国放送入社、報道部副部長、報道センター部長、テレビ局長、中国放送取締役、RCC文化センター代表取締役社長、現在RCC他の顧問

☆ 制作者としての総括・感想等

- ・本土決戦を前に広島には第二総軍の司令部が置かれていた。被爆から終戦を迎えるまでは軍の指揮の下、鉄道・電車・水道・ガス・電気等のライフラインが短日間で復旧された。
- ・金融機関のトップの即断・即決による英断で被爆後2日目に日本銀行広島支店で12の銀行が営業再開。
- ・三菱重工業・本通りの復興や二葉会の活動も強力なリーダーがいたから可能。ヤミ市から「イズミ」や「フジ」に育て上げた逞しい商魂も良きライバルがいたから。旧呉海軍工廠の技術と人が東洋工業と三菱重工業の発展に多大な貢献。
- ・戦後すぐのまちづくりの復興構想における市の長島敏復興局長の先見性、平和記念都市建設法実現に向けて法を草案した寺光忠参議院議事部長と任都栗司市会議長の功績も忘れてはならない。



☆ 制作者からのメッセージ

- ・先日福岡に行く機会があり、広島のみちとの勢いの差を肌で感じた。旧球場跡地活用も定まらず、広島駅周辺の高層マンションを主体とした再開発にも首をかしげる。昔、札幌と並列に呼ばれた時期もあったが、現在は仙台にも抜かれ都市間競争に取り残された感がある。経済界も戦後に比べるとあまりに小粒でリーダーシップは期待できない。首長の力量が問われているのではないか。

<会場より>

- ・戦後の速やかな復旧に対して職業倫理の質問あり。終戦を迎えるまでは、軍としては本土決戦を控え、国民の士気が落ちるのを恐れて遺体の後始末やインフラ復旧を急ぐ必要があった。終戦以降は広島人の進取の気質や市民の活力に負うところが大きい。

女学生の看護婦や電車の運転手等は親が迎えに来ても、広島に残って仕事をやり続けたという話や戦地から職人が戻ってきて復興に寄与したという話もある。軍の司令だけでなく重層的・複合的な要因で達成されたのではないか。

- ・社会に奉仕するロータリークラブの精神は軍の弾圧を受けて地下に潜る。戦後その精神が解放。同クラブの西日本大会が広島に決定。その会場として公会堂を建設する機運が高まり、支援母体として二葉会が誕生。陰徳の精神で、その後次々と支援を繰り広げた。

<コメント>

映像は公文書館等に保存して幅広く活用されることを望む。 (編集委員 瀧口信二)

第23号 (平成28年5月15日)

○ 「時代を語り建築を語る会 (第12回)」報告 語り人：森保洋之氏

～宮島の町家通りにおける新たな魅力づくりと地域再生活動～

宮島の昔の表参道とも言える町家通りの魅力づくりに長年関わってきた立場で、現状と課題や伝建地区(伝統的建造物群保存地区)指定に向けた最近の動向等について語る。

主催：時代を語り建築を語る会実行委員会(代表：石丸紀興)

日時：2016年3月17日(木) 18:30～20:30

場所：合人社ウエンディひと・まちプラザ

☆ 宮島と関わり始めた経緯

- ・1993年、広工大が新学部：環境学部を開設する際に、専門としていた建築と都市計画の狭間分野の幅を広げ、地域・集落研究に着目。瀬戸内海の祝島他の多くの島々の調査を行い、ゼミとして宮島の重点地区化を考え、15年程前から関わりを強化した。
- ・町家通りの第一印象は、神社の門前町としての「清楚で落ち着いた佇まい」に強く惹き付けられたこと。

☆ 東町の町家通りの特徴



略歴：1968年千葉工大卒業、1969年東工大助手、1981年広工大助教授、1988年東工大客員助教授、1990年広工大教授、2013年同大退官、名誉教授

- ・室町時代から埋立てが始まり、海側に順次「列状」に土地を造成。町家通りは江戸初期から、通りの両側に町家が並ぶ両側町を形成。
- ・町家の特徴は、切妻造平入で間口狭小、「通り土間」や「坪庭」を持ち、表から「みせ・おうえ・ざしき」の1列3室型の平面形式が主。「おうえ」は吹抜けであり、神棚等が祀られる特徴ある空間。
- ・町家は宮大工系の大工に係る例もあり、ディテールにその特徴がみられる。「坪庭」の平面上の位置に、2階の設け方や通風等の隣家を含めた配慮があり、《作法としての規範性》が窺われる。
- ・格子の表構えと3寸勾配屋根の緩やかな家構え、その連続としての家並みの風情が、通りの趣きを醸成。外観からは分り難いが、各種の年代の町家が並列・共存しているという特徴も大きい。



「町家通り」の家並み

☆ 地域再生の活動等

- ・10年前に大学が民家を借りて、広工大・地域環境宮島学習センター（通称「宮島こもん」）として活用。定期的に宮島を学ぶ「宮島・土曜講座」を開くと共に、まちづくり等の相談を受ける「オープンこもん」も開いて地域に還元。
- ・外観を維持しながら内装を改修して町家を活用する事例が多い。しかし、町家の特徴を保持するためには、外観・内観共に、どの部分は、どの時代の何を大事に、いかに改修するかというルール（ガイドライン）づくりが、大至急求められる。
- ・観光は名所旧跡等を観て回るのが従来のスタンスだが、住民の発する生活上の光を観てもらおうという「生活の観光化」が、これからの流れであると考えている。高質の観光客は既にそれを求めており、この認識と具体的な対応が宮島の再生に繋がろう。

☆ 伝建地区化に向けての提言

- ・伝統的町家は約460棟。うち江戸期のものは東町約30棟、西町約20棟といわれる。
- ・世界遺産の緩衝区域の居住地に伝建地区があり、世界遺産と伝建地区の関係を補完する制度的検討が必要。伝建地区範囲外にも伝統的町家があるため、伝建地区の周辺を含めて歴史まちづくり法を適用し、伝建地区の周辺をそのバッファゾーンと位置づける。当制度により町家修復・まちづくり等の補助・支援を行い、各種整備を現実化する提案は是非検討されるとよい。
- ・文化財相当の町家は外観の修復のみでなく、表から「おうえ」までを規制対象として整備し、平面形式を保存すること、文化財未満の町家は修景に努めること等も提案したい。
- ・今年2月に伝建地区の保存審議会がスタートしたが、伝建地区化推進に向けて官学民の支援組織化が大事。建造物の文化財としての住民の認識の共有化、修理・修景技術等のガイドライン化は重要。その為に大学人、建築家（特にHM）、施工企業、大工、左官、材木屋等の協働は必須であり、何れも従前の技術・知識内容を自問自答し、絶えない研鑽が不可欠である。

（参考）HM：ヘリテージマネージャー（歴史的建造物の保全・活用に携わる専門家）

<会場より>

・土地・建物の所有の形態は？

昔、後町通り沿いは某地主が多くを所有。町家通りも広い土地や飛び地を所有している人がいる一方、借地や借家の人も多いが、これらの詳細は明確には掴めていない。土地の埋立て等は時の為政者（広島藩等）が主導したと推察するが、神社等との係りは不明である。

・生活の生業は？なぜ残ったか？

杓子等の木工、陶工・紙工、旅館、土産屋等の営みがあり、表参道には情報センター的機能もある。町家通りが裏通りとなり、寂れたことが昔の姿を残す一つの要因とも考える。伝建の話が浮上した当初から具体的措置を待ち、町家修復等を留保してきた現状もある。

・後継者は？

店を継ぐ人も生活は宮島を離れている人が意外に多い。また、空き家や空き地も発生しており、その借り手の斡旋、その利活用の内容、管理の問題等も大きな課題になっている。

<コメント>

長年の研究に培われた味わい深い話を聞き、宮島ファンになった。先生の手元には分厚い資料があると聞く。伝建地区化に向けて、有効活用されたい。

(編集委員 瀧口信二)

第24号 (平成28年7月15日)

○ 「時代を語り建築を語る会 (第13回)」報告 語り人：西本雅美氏

～原爆報道を考える～被爆直後からプレスコード下、そして今～

中国新聞社の中でも特に被爆問題に精通した西本氏より、原爆報道の実態や問題点等について具体的に語ってもらった。

主催：時代を語り建築を語る会実行委員会 (代表：石丸紀興)

日時：2016年6月18日 (土) 15:00～17:00

場所：合人社ウエンディひと・まちプラザ

☆ 被爆直後の原爆報道

- ・1945年9月3日、後の侍従次長が天皇の名代として広島入りし、同行した日本映画社が「広島市の惨害」を撮影。映画館で日映ニュースとして上映。天皇もその映像を目にする。(会場で映像を流す)
- ・同日に欧米の従軍記者団が広島に入り、連合軍ニュースとして被爆後の惨状を伝える。(アメリカのニュース映像を流す)
- ・米物理学者が述べた「70年不毛説」を毎日新聞が8月23日付で報じ、広島市民を震撼させたが、9月10日付で中国新聞は「嘘だ、七十五年説」と報じ、15日付で「死者十一万人を超ゆ」、「原子爆弾症は免れず」と伝える。

☆ 検閲 (プレス・コード)

- ・1945年9月19日、連合軍総司令部 (GHQ) は新聞を始め出版、ラジオ放送、映画を検閲するプレス・コードを指令。目的は占領軍に対する不信や怨恨を招く内容を封じるため。
- ・一方、廃墟からの復興や平和に焦点を当てた報道は認められていた。民間検閲局 (CCD) は1949年10月に廃止されたが、1950年6月に米ソ対立に起因する朝鮮戦争が勃発すると、GHQの指示により各報道機関は、共産主義者またはその同調者とみなした人々を解雇。1950年の広島市の平和祭も突如中止。戦後の報道の自由も占領下における管理された自由でしかないと思知らされる。
- ・1952年4月、対日講和条約が発効し占領が終了。メディアの自己規制が解かれ、原爆関連の情報も広く取り上げるが、多くは同情の域にとどまる。

☆ 広島市の平和運動

- ・原爆は身の回りの生活基盤を根こそぎ破壊し、被爆者は生きていくことで精一杯。復興は、原爆で肉親を失った人々や疎開先や戦地から戻った市民、転居してきた人々が、生活再建に取り組むなか、全体として進んでいった。戦争に対する憎しみ・怒りから戦後の民主化がスタートしたが、広島市の戦後の平和運動は決して先鋭的ではなく、風土に根差した温和なものだった。1949年に広島市の戦後最大の労働争議と言われる日鋼争議が起きたが、占領軍の命令によりストは解除され、労働運動も制限された。

☆ 平和運動の貸座敷

- ・1954年3月、米国の水爆実験による「死の灰」を浴びたビキニ事件が発生。原水爆禁止運動が高まり、1956年に日本原水爆被害者団体協議会が結成されるが、社会・共産両党と支援労組の路線対立から1963年、原水爆禁止世界大会は分裂。「ソ連の核実験の灰なら浴びてもいい」という発言まで飛び出す。死者が眠る広島市の地でそのような論争をして欲しくないという怒りの声として、中国新聞は「広島は平和運動の貸座敷ではない」という社説を掲載。

☆ ヒロシマ20年

- ・1965年の夏に中国新聞は、取り残され苦しみを強いられる被爆者の側に立った特集を組む。



略歴：広島市生まれ、1980年中国新聞社入社、1986年報道部所属、2016年定年退職後、特別編集委員



その流れで在韓被爆者の存在をルポし、在外援護の扉を開く。原爆の威力ではなく、原爆による人間的悲惨さを世界に知らせなければいけない。国家の論理から人間の側に立つべき。

☆ 進む定型・形骸化

・最近の傾向として、裏付けを取らない誤った記事が散見したり、安易にステレオタイプ化したり、分かりやすく物語化することが見受けられる。積み重ねられた原爆の記録と記憶を正しく語り伝えていくことがメディアの役割である。

(編集委員 瀧口信二)

第26号 (平成28年11月15日)

○ 「時代を語り建築を語る会 (第14回)」 語り人：岡河 貢氏・宮森洋一郎氏 ～広島ピース&クリエイト2045は何を残したか～

平岡市長時代のデザイン政策「広島ピース&クリエイト2045」(以下ピークリ)について語る会代表の石丸氏が論点を提起し、岡河氏と宮森氏を交えて鼎談風に議論した。

主催：時代を語り建築を語る会実行委員会 (代表：石丸紀興)

日時：2016年9月16日 (金) 18:30～20:30

場所：合人社ウエンディひと・まちプラザ

☆ 論点提起 (石丸)

建築による街の改造計画にフランスのミッテラン大統領時代のグラン・プロジェがある。日本では1980年代後半に熊本の細川知事によるアートポリス政策があり、著名な建築家の作品が次々と誕生。その流れで広島でも1995年から被爆50周年を記念してピークリがスタート。今は立ち消えになっているが、10近くの完成作品があり、ピークリの制度の意義や在り方、作品等について議論したい。

☆ 自己紹介を兼ねて日頃考えていること

(宮森) 設計事務所を開設して35年。広島のまちや建築について気になる点や提案等の事例を紹介。

(岡河) 若い頃グラン・プロジェの一つラ・ヴィレット公園のフォーリーの設計に参画した経験あり。18年前に呼ばれて広大な建築学の教鞭をとる。パリの大改造計画は古い街並みに新たに魅力的な建築を点として整備し、周りを活性化していく政策。その考えを建築家磯崎新氏が取り入れて熊本のアートポリスをプロデュースし、広島のピークリにつながる。

☆ ピークリに対する評価

(宮森) 多くは外部のデザイナーに委ねられ、地元の建築家は忸怩(じくじ)たる思いがあった。一般的に外タレをありがたがる風潮があるが、頼り切るのはまずいので、地元の人たちが中心となってまちを改善していく自己再生産システムが求められる。

(岡河) ピークリはアトリエ系の建築家に依頼する手法に終わって、本来の意味が問われていない。ピース&クリエイトのクリエイトはなされたが、ピースが欠落。見直しが必要。

(石丸) 行政主導のシステムのメリット・デメリットを整理し、良い点は評価して継承していくのがよい。市民の建築文化を高めるためにもピークリ対象の公共建築はもっと議論して成果を活かすべきである。

☆ 被爆建物の活用

(岡河) 広島も原爆ドームを残したことで平和を世界にアピールできるまちになった。ピークリの精神を育てるためにも被爆建物を積極的に活用していくべきだ。

(石丸) 同感だが、被爆建物を活用するには構造、法規、予算等の問題が山積して袋小路状態にある。それを乗り越えるための戦略を考える頭脳集団が必要。

☆ これからやりたいこと

(岡河) グラン・プロジェはパリの生き残り戦略の一つ。広島もグローバルなメッセージが可能であり、国際都市の意識をもって取り組みたい。ピークリは広島にしかできないことで



岡河貢氏 (広大大学院
建築学専攻准教授)



宮森洋一郎氏 (宮森洋
一郎建築設計室主宰)

あり、被爆建物をつないで広島全体を平和公園のプロムナードにするアイデアを持っている。
(宮森) ピークリの中工場は開放的で美しいし、マツダスタジアムもみんなから愛され、この二つは公共建築のお手本。建物の良さを市民に感じてもらえば、建築文化を高めることができる。そのためにもより良い公共建築を生み出す設計者選定システムが求められる。

(石丸) 被爆建物は自分のメインテーマの一つとして取り組み、その活用の実施段階では国際コンペで英知を集めるとともに世界にヒロシマを発信できればよいと思う。広島平和記念都市建設法を活かしたまちづくりの復活を目指したい。

☆ まとめ

(石丸) 外来の建築家でも優れた設計なら地元にとって貴重な財産となる。ピークリの理念を再構築して設計に反映できるデザイン政策に発展させていければよいと思う。

(編集委員 瀧口信二)

第28号 (平成29年3月15日)

○ 「時代を語り建築を語る会 (第15回)」報告 語り人: カローラ・ハイン氏 ～欧米を通観しての日本の都市計画と都市計画史を語る～

世界的レベルの都市計画史の研究者としてオランダで活躍中のデルフト工科大学教授カローラ・ハイン氏にオランダ、ドイツや日本のまちの特徴等について語ってもらった。

主催: 時代を語り建築を語る会実行委員会 (代表: 石丸紀興)

日時: 2016年10月27日 (木) 18:30~20:30

場所: 合人社ウェンディひと・まちプラザ

☆ オランダのまちの形成

・冒頭、アムステルダム埋め立てによる土地造成からまちの形成までを説明するCG映像を流す。大阪湾沖に建設した関西空港をオランダ全土に展開した感じ。国土の1/4は海拔ゼロ以下。

・運河が張り巡らされた国土拡張の目的は? →江戸時代に長崎の出島ができた頃、それを見た資産家たちがビジネスのためにアムステルダムの埋め立てを始めたという。酪農のための牧草地等に利用。

(聴講者より) 広島も埋め立てにより発展したまちだが、明治期の宇品港の干拓にはオランダ技師の技術指導があったという。

・オランダは1万年に1度の水害にも耐えられる構造基準。沖合に大きな堰を作って海水の干満の差を調整するという壮大な構想。

地球温暖化による海面水位の上昇等これからの課題あり。

・13世紀ごろから干拓が始まり、水利権をつかさどる水利管理委員会による民主的な運営が浸透。全員が賛同するまで徹底的に議論し、ワークショップが盛んな国柄。

・ロッテルダムはヨーロッパ最大の港。自国よりもドイツの工業のために活用されている。

・ボンネルフ (オランダ語で生活の庭) は、車は街区の外側に駐車させ、街区内は車を徐行させる工夫をした歩車道一体のコミュニティ道路とし、人間優先のまちづくり。

ボンネルフはオランダの古都デルフトが有名で、住宅街は民主的な社会を目指し、貧富の垣根がないのも特徴。最近日本でも試験的に導入されている。

・オランダの広場では多くの市民がビール片手に楽しんでいるが? →西欧の人たちはそれが楽しみであり、生活スタイルである。

☆ 日本のまちの印象等

・日本にいた頃 (1990年代)、東京のまちの中にもあった人情味豊かな社会が、今は区画整理や再開発が進み崩壊しているのは残念。再開発は上手に自然を取り入れる必要あり。

・最近外国人観光客が急増しているが、効果的な対策が取られていない。各都市のまちづくりに合ったきめ細かな観光政策が必要ではないか。

・日本の戦後復興は行政主導の都市計画で進められたが、ヨーロッパでは建築家等のアーバ



略歴: ハンブルグ及びブリュッセルで大学卒業
1995年から1999年まで東京首都大学と工学院大学で
大戦後の日本都市の復興、西欧からの日本都市計画への影響等の研究
1999年からプリン・モアー大学
2015年からデルフト工科大学教授

ンデザインが主流。広島は丹下健三氏の平和記念公園構想が活かされた稀有な存在。

☆ 母国ドイツのこと

・ドイツでは政治と建築がリンクしている。例えば、ヒットラー時代は彼好みのネオクラシック・スタイルの建築が隆盛。彼を嫌うモダニズムの建築家はアメリカに移住し、戦後アメリカ人としてドイツに戻って活躍した。

・ドイツの公共建築は基本的にコンペで設計者を決定。ただし、マスタープランで外壁面の位置・高さや材質・色彩等の条件が決められている。

・どうして建物の高さをそろえるの？→生まれ育ったハンブルグではまちのスカイラインを大切にする。子供の頃から3つの教会のシルエットに愛着があり、新築する場合もそれを壊さないように配慮している。

・ハンブルグの戦災復興は？→3日間の焼夷弾で町の75%が焼かれたが、石造りの町なので補修しながら復元。ただ、ビジネスシティなので、保存よりは建替えが優先される。

☆ コメント

外国人から生の情報に触れると好奇心をそそられる。

(編集委員 瀧口信二)